平成 28 年 11 月 9 日

中山道を歩こう会

（北本～北鴻巣）

北本駅をスタートして鴻巣宿へ、そして北鴻巣駅までを歩きます。鴻巣は雛人形でも有名な町です。

記

■**日　　時**：平成 28 年 11 月 9 日（水）8 時 35 分集合

■**集合場所**：新秋津駅 改札外
（東所沢駅から 8：44 発むさしの号後の車両に乗車下さい）

■**見学場所及び時間：コース全長約 10km**
新秋津駅(8:41 発　むさしの号大宮行)⇒北本駅（9：30）
⇒旧中山道、馬室原一里塚⇒**小休止**⇒鴻巣市産業会館⇒勝願寺
⇒**昼食**（華屋与兵衛）⇒鴻神社⇒箕田観音堂⇒箕田氷川神社
⇒箕田追分⇒北鴻巣駅…南浦和経由　所沢（17:30 頃帰着予定）

■**交通費（所沢から）：約 1,900 円**

■**昼食　華屋与兵衛　鴻巣店　12:00～13:00　☎048-544-1787**
下記のメニューから事前に選んで下さい
ランチメニュー　グランドメニュー

■**散策先簡単ガイド**

＜旧中山道・馬室原一里塚＞

北本駅の東口を出て真っ直ぐ行くと旧中山道に突き当たりますが、今回はその前に左に折れて江戸時代初期に使われていた古中山道を行きます。

馬室原一里塚は江戸から 11 番目の一里塚で道を挟んで東西にあったのですが、東塚は高崎線を通すので壊され、現在は畑の中に西塚のみが残っています。

休憩：サンマンション東野公園

＜鴻巣宿＞

元々は、本宿村（現北本市）にあった宿を、慶長７年（1602）に現在地へ移して鴻巣宿と改称しました。本陣１軒、脇本陣１軒、旅籠は 58 軒あり比較的大きな宿場でした。徳川家康の鷹狩用の御殿が建ち四・九の市も立ち栄えたが、明和四年(1767)をはじめ度重なる大火で町の大半を消失。しかし再び商業や遊興の町として繁栄しました。

深井２丁目交差点に「鴻巣宿加宿上谷新田」という石碑が建っています。宿場にて、人家が少なく人馬を出しにくい場合、隣接する村を加え人馬の用を行わせた。この主となる宿駅に対して隣接する村を加宿と言いいます。

ここを過ぎると**人形町**に入り大きな雛人形店が多くなります。鴻巣は岩槻と並んで江戸初期から雛人形造りが盛んです。

鴻巣市産業観光館：かつては江戸時代から続く老舗人形店「吉見屋」が開設していた「**雛屋歴史資料館**」を人形店の閉店に伴い、鴻巣市に資料とともに寄贈したもの。（木曜休館）

＜勝願寺＞

勝願寺仁王門

鎌倉時代第４代執権北条経時により登戸に建てられたが、天正元年（1573）に現在の地に再興されました。文禄２年（1593）**徳川家康**が鴻巣で鷹狩を行った際に勝願寺を訪れ、二世住職円誉不残上人に感銘を受け、様々な宝物を寄進、また**三つ葉葵を使用する事を許可した**といわれます。家康は、慶長２年（1597）、６年、９年にも鷹狩を行い、慶長６年に訪れた際には、**結城城**（家康の次男 結城秀康の越前移封によって、領主不在となった）**の御殿、御台所、太鼓櫓、築地三筋塀、下馬札、鐘**などを寄進した。御殿は 114 畳敷きの「金の間」（将軍しか使えない）、96 畳敷きの小方丈「銀の間」があった。

しかし明治時代の竜巻により御殿は全壊、その後の火災により本堂、庫裏、鐘楼、仁王門など殆どの施設や宝物は失われ、**本堂**と**仁王門**が再建され現在に至っている。

伊奈忠次・忠治の墓　忠次・忠治父子は関東代官として各地で新田開発、河川改修等の功績を挙げました。埼玉県の伊奈町、茨城県の伊奈町と親子2代に渡って町名の由来になっています。（墓地内）

仙石秀久の墓　信州小諸の城主。はじめ豊臣秀吉の家臣で後に家康に仕えた。江戸から小諸へ戻る途中当地で没しました。

小松姫の墓　本多忠勝の娘で家康の養女となり真田信之（信繁（幸村）の兄）に嫁いだ。関ヶ原で袂を分かった昌幸・信繁親子が沼田城に立ち寄り城に入ろうとしたところ、留守を預かる小松姫が甲冑に身を固め、城門を硬く閉じ、夫不在の城を守ったとの逸話が残されています。NHKの真田丸では吉田羊が演じています。

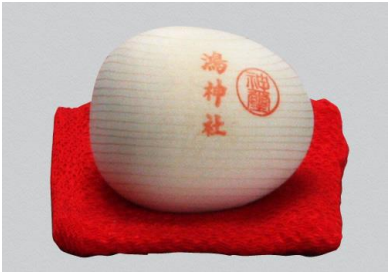
小松姫は二世住職円誉不残上人に深く帰依していたことから分骨され勝願寺にまつられています。

芭蕉句碑：けふばかり　人も年よれ　初時雨

＜鴻神社＞

鴻神社は明治6年に三ヶ所の神社を合祀したもので、もとは鴻三社といわれていましが、明治40年に鴻神社に改めました。

こうのとり伝説　昔、「木の神」と言われる大樹があり、人々は「神様の木」として大切にしていました。ところがお供えをしないと災いを起こすので人々は困っていました。ある時、こうのとりが来て、この木の枝に巣を作り卵を産みました。すると大きな蛇が出てきて卵を食べようとしまた。これを見たこうのとりは蛇と戦い、これを追い払いました。その後、この地は災いもなく平和な日々が続いたので、木の下にお宮を建て「鴻の宮（こうのみや）」と呼ぶようになり、土地の名も鴻巣と呼ぶようになったと伝えられています。



「こうのとりのたまご」お守り

なお、この地には一時、国府関連の施設があり荒川などを利用した水運も盛んだったことから「国府の洲」が「こうのす」となり、後にこうのとり伝説から鴻巣の字をあてるようになったとも考えられています。

夫婦銀杏　社殿両脇にある樹齢 500 年を越えるイチョウは雄木と雌木で、子育て・安産・健康長寿・夫婦円満のご神木として親しまれています。

なんじゃもんじゃの木　社殿の裏にはなんじゃもんじゃの木が植えられています。日本では希少種の一つであり、絶滅危惧 II 類に指定されています（モクセイ科ヒトツバタゴ属の一種)。ゴールデンウィークの頃には、まるで雪に覆われたような美しい姿を見せてくれます。

鴻神社前交差点から東に行く道は**日光裏街道**と呼ばれる道です。鴻巣宿はこの先の加美交差点で終ります。

＜伝源経基館址＞

六孫王源経基館址

今回は割愛しますが、鴻巣駅の西約 1km の所に県指定史跡の源経基館跡とされている所があります。清和源氏の祖である経基が武蔵介となって館を築いた場所です。経基が武蔵介となったのは平安中期の 939 年なので相当に古い館址で、東西 90m、南北 82mの城郭です。

経基は足立郡司と対立し、その調停役となった平将門が経基館に向かったところ将門が攻めてきたと思い京都に逃げ帰り、将門等の謀反を訴えたが、かえって誣告に問われました。その後、将門が「新皇」を僭称して、以前の誣告が現実となった事により経基は晴れて放免されるばかりか、それを功と見なされて従五位下に叙せられました。その後、武蔵・信濃・筑前・但馬・伊予の国司を歴任し、最終的には鎮守府将軍にまで上り詰めました。

＜箕田観音堂＞

箕田(みだ)観音堂は渡辺綱(つな)が開祖とされます。ここに祀られた馬頭観世音は、源経基が戦いの折に兜に頂いて出陣した一寸八分の尊像です。この由緒ある観音堂の入口にある一対の灯篭には「三ツ星に一文字」の渡辺紋が彫られています。

陸奥守（鎮守府将軍を兼務）として前九年の役を戦った源頼義の守り本尊であったと記述しているところもあります。

＜箕田氷川八幡神社＞

箕田碑

渡辺綱が、永延 2 年（988）当地に八幡宮を勧請して創建したといいます。入口に「箕田碑」があります。これは、この地に発祥した**箕田源氏**の由来を記した碑です。

英泉画 渡邊ノ綱

嵯峨天皇の皇子源融（みなもとのとおる）の孫の源仕（つこう）が武蔵守として館を建て、勢力を築き箕田氏と称しました。仕の孫 **渡辺綱**（源綱）は頼光四天王の随一として剛勇の誉れが高く**大江山の酒呑童子退治**や、京都の一条戻橋の上で鬼の腕を源氏の名刀「**髭切りの太刀**」で切り落とした逸話で有名。箕田氏三代（仕・宛（あつる）・綱）の館跡は満願寺の南側の地と伝えられています。

氷川神社の裏手の宝持寺は綱が祖父融、父仕を供養するために建てたものと言われています。

＜武蔵水路＞

この水路は、東京オリンピックを前にした昭和 36 年頃から渇水の続いた東京都の要請で、利根川の水を荒川へと導く 14.5ｋｍの導水路として昭和

38 年に着工、昭和 43 年に完成しました。この首都圏の生活を支える大動脈としての武蔵水路も、最近では経年劣化から漏水や地盤沈下という老化現象に悩まされているのだそうです。

＜箕田追分＞

追分から北へ行く道は忍（行田）、館林に向かう道です。その追分には説明板が立っています。また反対側には小さな地蔵堂があります。

＜帰路＞

北鴻巣（高崎線）⇒浦和（京浜東北線）⇒南浦和（武蔵野線）⇒新秋津経由所沢着 17:30 頃予定　　以上